



“家族”
4歳児 ポーランド

幼年美術

602

2019 6月号

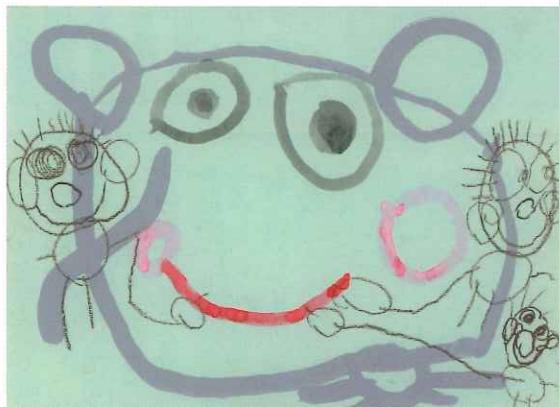
発行所 大阪府東大阪市長田中4丁目6-3
ぺんてる(株)大阪支社内

全国幼年美術の会 ☎577-0013 ☎(06)6747-1601

発行人 木代喜司

年間購読料 3,000円 1部300円（送料込み）

第49回 世界児童画展 作品より



“ぐるんぱに、リンゴあげたいな”
3歳児 山口県



“回転寿司”
5歳児 京都府

子どもの絵と大人の絵。何が違うのか。作品として描かれた大人の絵と、無邪気に心の赴くままに描かれた子どもの絵は違つて当たり前だ。これは大人と子どもの違いではない。はじめからだれかに見せる目的で描く絵と純粹に自分のために描く絵の違いだ。もちろん後者の絵も描いているうちにだれかに見せたくなることはある。むしろ見せたくなるのは自然な欲求だ。けれどもスタートにその目的はない。子どもは成長とともに見せることを前提とした絵を意識するようになる。そして、自分の心より他人の心が気になる。そうするとだんだん心の赴くままに絵が描けなくなる。

子どもの絵は、自由が保障されていることが前提だ。やりたくなつたらはじめるし、やめたくなつたら終わる。主導権はいつも自分自身私はこれまで展覧会に向けて作品づくりはしてきた。けれどそういう絵を描くこと、私ははずいぶん忘れていた。六十歳を過ぎてそういう絵遊びをはじめた。毎日一枚、落書きする。もう一年になる。飽きずに続いている。そして、だからやめられない。

落書きなり
いろいろ試したくなる。
に欲がでて、
いたくなる。
だからやめられない。



子どもの絵と大人の絵。何が違うのか。作品として描かれた大人の絵と、無邪気に心の赴くままに描かれた子どもの絵は違つて当たり前だ。これは大人と子どもの違いではない。はじめからだれかに見せる目的で描く絵と純粹に自分のために描く絵の違いだ。もちろん後者の絵も描いているうちにだれかに見せたくなることはある。むしろ見せたくなるのは自然な欲求だ。けれどもスタートにその目的はない。子どもは成長とともに見せることを前提とした絵を意識するようになる。そして、自分の心より他人の心が気になる。そうするとだんだん心の赴くままに絵が描けなくなる。

子どもの絵は、自由が保障されていることが前提だ。やりたくなつたらはじめるし、やめたくなつたら終わる。主導権はいつも自分自身私はこれまで展覧会に向けて作品づくりはしてきた。けれどそういう絵を描くこと、私ははずいぶん忘れていた。六十歳を過ぎてそういう絵遊びをはじめた。毎日一枚、落書きする。もう一年になる。飽きずに続いている。そして、だからやめられない。

落書きなり
いろいろ試したくなる。
に欲がでて、
いたくなる。
だからやめられない。

自由に描くということ



作品を通して幼児理解を図る取組

、京田辺市立幼稚園研究会より、

京田辺市立草内幼稚園 園長 本田扶佐子

京田辺市は、京都府南部に位置し、新興住宅の開発に伴い、年々人口が増加傾向にあります。小学校に隣接している8園の公立幼稚園には、3歳児から5歳児までの園児が約700名通っています。50名程度の教諭で運営している京田辺市立幼稚園教育研究会は、子ども達一人一人の発達に応じた支援や環境構成についての研修会を、年間を通じて開催しています。

主な取組として、公開保育を含む研究実践や表現活動を通じて、意見交流を行い、発達の課題に即した指導を行うための工夫に努めています。他校種にわたり、子どもの実態を交流したいと考え、市立小学校や保育所の先生方も参加して頂き、話し合いを進めています。

平成30年度に開催した冬季研修会では、第32回目となる京田辺市立幼稚園絵画展開催に向けて、展示している作品を通じて、子どもの心を読み取り、指導を振り返る学びがしたいと考え、京都幼年美術の会の先生方にお越しいただき、ご指導を賜りました。

結果として、来園者からは「子どもらしい大人が真似のできない作品がたくさんありました」「子どもの成長をとても感じることができました」など多くの感想を頂きました。私達は、多くの方々から貴重なご意見、ご感想をいただき、それを励みに、保育に生かせるように、努めていきたいと思っています。

それでは、研究会として表現活動の取組を、具体的に紹介したいと思います。

戸惑うことが多いです。友達がしている遊びを見ているだけでも興味を持ち、心が動いていることを大切にしています。

そして好きな素材や使いたい素材を選び、自分でやってみることを繰り返し、3歳児なりに遊びに満足する経験ができるようにします。そのためには、保育者自身がわくわくするような素材を、日常生活の中でも探したり、集めたりして、幼児が欲しいと思った時に幼児の思いに近い物を、すぐに出せるような環境を整えていきます。そして、描いたり切ったり、貼ったりする遊びの作品から、子どものつぶやきが聞こえてくることを、願っています。



4歳児は「思い切り遊ぼう」とテマに「もつとやりたい」「やってみたいな」「おもしろいな」「またしよう」の声を大切にしています。4歳児は遊びのため込みの時期とされています。まだまだ経験的にも発達的にも個々の差がある中で、生活に繋がっている先行体験や実体験から、たくさんのものに触れ、幼児が自分なりに気付き、のびのびと表現できようになります。また4歳児ならではの描画の線を大切にすることを心掛けています。短い線や細い線など、どんな線にも意味があり、幼児の思いが詰まっている線からは、児の思いに耳を傾け、受け止めいく姿勢が大切だと考えます。



5歳児は「表現すること」を楽しもう」とテーマに「それいいな」「わーすごい!」「一緒にしよう」の声から、自己発揮しながら協同性を大切にし、保育を目指しています。

5歳児は3、4歳児で積み重ねてきた経験を土台に、遊びを追求し、楽しむ時期とも言われています。

“こうしてみたい”と自分の思いをしつかりともち、友達と関わりない

がら絵画活動をすすめて欲しいと願っています。子ども達の作品には、意図的に作った色もあれば、絵を描いている時に偶然に絵の具が混ざつたりにじみ合つたりするような偶発的な色もあり、子ども達が思つてもいない色との出会いがあります。色の美しさや不思議さを感じ、色の発見にわくわくし、楽しいと思える経験ができるよう、保育環境の工夫に努めています。

題材に対しても、色画用紙や絵の具を子どもが自ら選び、考え、取組を進めることができ、遊びへと繋がっています。

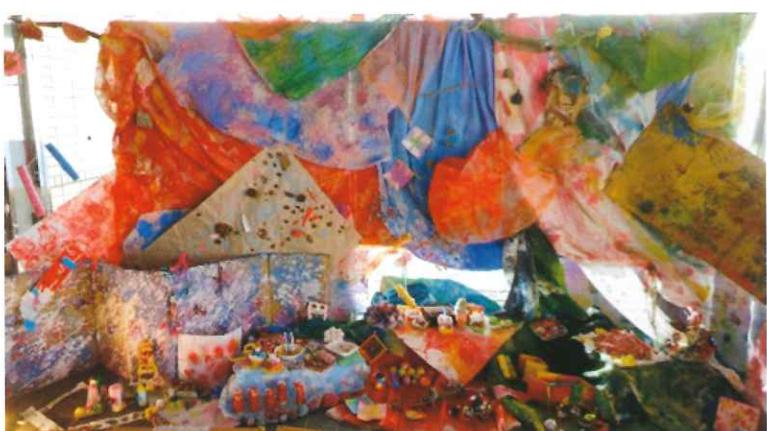
絵画活動は、完成した作品だけではなく、その作品にたどり着くまでの過程にこそ、児童の多くの学びがあるということを意識しながら、「児童の心の動き、つぶやき」を大切にしています。全ての作品には、同じ絵が一つもなく、個性豊かな絵画作品が展示できるのだと考えていました。

それでは絵画展より、コーナーごとの展示の工夫を紹介します。



入り口の「正面のパネル」には、「**「幼稚一人一人の心を大切に」**と、絵画展のテーマを表わしています。 幼児は毎日の生活や遊びの中で、いろいろな経験を積み重ね、そこから得た感動を描き、作り様々な方法で表現していきます。 子ども達が何に心を動かしているのかは、一人一人

違います。その一人一人の心のメッセージを大切にしています。5歳児の作品として、四つ切り画用紙では表現できない共同画やじっくりと見て表現した作品などを展示しています。



う作りなど、いろいろな遊びを楽し
み、経験を積み重ねて いる姿や遊び
の中での学びを紹介しています。又
「写真のコーナー」では、日頃の幼
児の生活や遊びのひとこまを、紹介
しています。嬉しい笑顔、驚きの表
情、真剣なまなざしなど、さまざま
な表情を見る ことができます。8園
の位置やそれぞれの園の特色のある
取組も紹介しています。



「小さな作品のコーナー」では、5歳児が8園それぞれに、友達といいを膨らませ、イメージを共有しながら、地域で見つけた素材や、家庭から持ち寄った生活での素材を選び、表現しています。友達と話し合ったり、相談したり、互いに折り合いをつけたりしながら、作品に向かう姿勢は、5歳児らしい創意工夫やイメージの広がりが見られ、来場者には大人気のコーナーとなっていました。

会場に見に来られた保護者には担当教諭が、「この子の作品はこの部分が良い」と具体的に、作品の良さ伝えるタイミングを大切にし、作品の出来で比較するのではなく、児童の意欲や興味などについて話すことでも、我が子の成長に気付いてもらうと共に、子どもの自信へつながることができるように、言葉掛けをしていきます。

展示の準備には、児童一人一人の作品が生きるような作品の配置を、特に考慮し、パネル構成の研修を大切にしています。上部に配置する

見え方が違うことを意識しながら、その絵がいきいきと輝ける展示の方法を探つていき、色の配置や素材の違った作品の展示などを考え、配置していきます。

パネル毎にはリーダーを中心となり、教諭間で意見を交流しながら、構成についての研修をしていきます。

このような研修を積み重ねていきながら、冬季研修会では、学年ごとにグループ協議をし、児童の作品を基に、絵の読み取りや捉え方を意見交換したり、絵画活動で大事にしたことなどを伝えたりして、互いに学び合えるように努めています。協議の中では、幼年美術の先生から、ご助言をいただきながら、それぞれの作品の表現の仕方や線から、児童の意欲や心がどのように読み取れるのかについて、話し合いを深めることができました。作品について聞きたい所や気になる所についても、先生方に日々の悩みを相談し、その悩みを的確に返して頂きながら、次年度への目標に向かう方向性を見つけることもできました。

日々の保育の充実が、表現活動にも繋がっていくことを心にとめ、今後も保育の質の向上に努めていきます。



場合と下部に配置する場合では、見え方が違うことを意識しながら、その絵がいきいきと輝ける展示の方法を探つていき、色の配置や素材の違った作品の展示などを考え、配置していきます。

パネル毎にはリーダーを中心となり、教諭間で意見を交流しながら、構成についての研修をしていきます。

このように研修を積み重ねていきながら、冬季研修会では、学年ごとにグループ協議をし、児童の作品を基に、絵の読み取りや捉え方を意見交換したり、絵画活動で大事にしたことなどを伝えたりして、互いに学び合えるように努めています。協議の中では、幼年美術の先生から、ご助言をいただきながら、それぞれの作品の表現の仕方や線から、児童の意欲や心がどのように読み取れるのかについて、話し合いを深めることができました。作品について聞きたい所や気になる所についても、先生方に日々の悩みを相談し、その悩みを的確に返して頂きながら、次年度への目標に向かう方向性を見つけることもできました。



本号では、京田辺市立幼稚園八ヶ園の研修会を通して学び、実践している様子を寄稿いただきました。3・4・5歳児と各年齢の時分に即した活動テーマによる表現活動をされ、その環境を如何にするかと工夫をこらし、その活動過程にこそ、子どもの沢山の遊びがあると、その心の動きや咳きを大切にする。そういった、保育のあるべき姿を希求・実践される様子をつぶさに感じます。そして展示した作品を前にし、保護者と関わる際も、作品の出来ではなく、一人ひとりの興味や意欲を伝え、そこから子どもの成長を感じてもらう、地道な努力をされています。子どもの表現活動が、何を主眼としているのか? この保育の姿をしつかり共有し、実践される姿を、頭が下がる思いで読ませていただきました。

多くの保育の現場では、「子ども達が「自分の花を咲かせる」ことの出来るようにと願い、様々な取り組がなされています。しかし、それを裏打ちする「時分の花を咲かせる」という、その年齢に適した活動が保障されない実践事例を数多く見聞きました。先ずは、今回ご紹介いただいた活動テーマや、そもそも子どもの表現活動における学びとは何なのかを、共々に学ばせていただきたいものです。このような就学前の経験を経た子ども達は、小学校入学後も、所謂、描ける・描けない、先生の言われる通りに出来る・出来ない、上手い・下手といった、本来であれば持ちえない心の定規に囚われることなく、教科書に提供される様々な楽しい活動を、安心して伸び伸びと取り組むことが出来るはずです。

こども達の心に、妙な手垢をつける、妙な定規を持たせる保育に陥らないよう、自身の保育を、指針や教育要領に照らし、又幼年の学びを通していければ良いですね。

(編集担当 羽溪)

あとがき